

# MUSASHINO Vol.116 for TOMORROW

巻頭

本の世界で音楽と戯れる

松田哲夫 (編集者・書評家)

卒業生の留学ライフ

チェコの音楽に魅せられて

後藤博亮

(ヴァイオリン/チェコ国立ヤナーチェク音楽芸術アカデミー博士課程在籍、  
チェコ国立ブルノ・フィルハーモニー管弦楽団 2016年春入団)



表紙：武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会  
東京芸術劇場 コンサートホール (2015年12月2日)

January 2016  
vol.116

# 謹んで新春のお慶びを 申し上げます

学校法人 武蔵野音楽学園 理事長 福井直敬



武蔵野音楽大学が、教育研究環境の抜本的改善を旨として進めておりました「江古田新キャンパスプロジェクト」は、去る7月に起工式を行って以来、建設工事が順調に進捗し、現在、基礎及び地下の掘削と躯体工事がほぼ終了した段階で、新しい年を迎えることになりました。建設地が閑静な住宅街の中心に位置し、建築基準上の高さ制限が厳しいので校舎は5～6層とし、機能別に6つの区画に分けて設計されております。従って、これら各区画の工事を並行して進めることができるので、竣工は予定通り平成29年1月が見込まれます。

すでに従前からお知らせしてあるとおり、このプロジェクトと並行し

て学科組織等の全面見直しを行い、現行7つの学科を演奏学科と音楽総合学科(仮称)の2つに大きく括り、教育課程は基本的にゼメスター制で編成して、学科目の選択肢を大幅に増やしました。これと同時に、従来やや縦割りとなっていたカリキュラムを、入学後の学生の意欲や関心に合わせ、弾力的に履修できる仕組みと致します。これにより、学生諸君が、自分自身の興味や可能性を確認した上で、学修目的や卒業後の希望進路に合った科目を履修することが可能になります。

学科の再編・統合とこれに伴うカリキュラムの改正は、平成29年度からの導入を目途に、近々文部科学省へ手続きを行います。終了次第具体

的な内容の周知を図ります。

新江古田キャンパスには、図書館、楽器博物館、IT機器等の研究施設、また、大・中・小のホール、各種リハーサル室、練習室等が完備されますので、カリキュラムの改定と相まって、教育研究内容の飛躍的向上が図られるものと期待されます。

昨年4月、大学の全ての業務を入間キャンパスへ集約し教育研究活動を行ってまいりましたが、明年4月には、再度江古田キャンパスへ移動して、いよいよ武蔵野の新しい歩みが始まります。

皆様の変わらぬご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。



①サンクンガーデン ②楽器博物館 ③図書館 ④キャンパスレストラン ⑤リサイタルホール(新モーツァルトホール) ⑥リハーサルホール(オーケストラ・ホール)

# 本の世界で 音楽と戯れる

● 松田哲夫 (編集者・書評家) ●

編集者として文芸・漫画・ノンフィクションなど様々な分野の本を手掛け、多くのヒット作を世に送り出した松田哲夫さん。人気テレビ番組『王様のブランチ』(TBS)では、書評コーナーのコメンテーターを長年に

わたって担当。トレードマークのヒゲと眼鏡、優しい口調で本を語る姿はおなじみです。そんな“本の達人”松田さんに、我々にとって興味深い音楽にかかわるオススメ本を紹介していただきました。ぜひ、2016年の読書の参考に！

が本の中で出会った音楽の話の思いつくままに書いてみます。



撮影・坂本真典

## 松田哲夫 Tetsuo Matsuda

編集者。書評家。筑摩書房顧問。1947年東京生まれ。東京都立大学中退。筑摩書房の書籍編集者として活躍。浅田彰『逃走論』、赤瀬川原平ほか編『路上観察学入門』、安野光雅ほか編『ちくま文学の森』、赤瀬川原平『老人力』、天童荒太『包帯クラブ』などのベストセラーを生み、「ちくま文庫」を創刊。一方、TBS系テレビ「王様のブランチ」コメンテーターを12年半務め、現在は、NHK「ラジオ深夜便」書評コーナー担当。著書に『編集狂時代』、『印刷に恋して』、『縁もたけなわ』など。個人編集のアンソロジー『中学生までに読んでおきたい日本文学』(全10巻)なども好評。

\* \* \* \* \*

ほくは、編集者という仕事を50年近く続けています。その間に、400冊以上の本をつくってきました。また、テレビなどで本を紹介する書評家にもなり、20年近く経ちました。その間に、1000冊ぐらいの本をすすめてきました。

ともかくにも本に囲まれて生きてきたほくは、何かを始めるときも、何かについて考えるときにも、まず本を手に取ります。

一方、音楽に関しては、鑑賞することも、演奏することも得意ではありません。これは、クラシックの、かなり偏った聴き手だった父親とヒステリックなピアノの先生に反発したせいだと思っています。

それでも、本を読む楽しみを音楽が広げてくれる、そういう経験を、しばしばしています。ここでは、ほく



## 『によによによつ記』

最初に取り上げる本は、さっきまで読んでいた、歌人の穂村弘さんの『によによによつ記』(文藝春秋)です。これは怪しげな日記のようなものですが、こういう記述が気になりました。

「5月12日 音楽室の謎

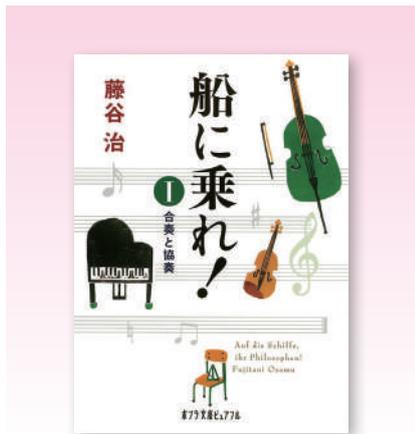
テレビドラマを観る。

音楽室のシーンで、壁の高い位置にモーツァルトの肖像画がかかっているのを発見して、ああ、と思う。

懐かしい。

(……)

でも、ふと考える。「どうして音楽室だけなんだろう」理科室にも、体育館にも、家庭科室にも、美術室にさえ肖像画はないじゃないか、というのです。なるほど、これは謎ですね。



## 『船に乗れ!』

学校で音楽といえば、合唱コンクールを目指す高校生を生き活きと描いた、中田永一さんの『くちびるに歌を』(小学館文庫)をはじめ、いろいろ楽しい小説を思い出します。

その中から一つ選ぶとしたら、ぼくは、藤谷治さんの『船に乗れ!』(ポプラ文庫/全3冊)をあげたいと思います。それは、この小説には、青春のすべてが盛り込まれているからです。

恋愛、友情、とりわけ音楽に全身全霊で体当たりしていく音楽科の高校生たちの姿は、輝くまでに美しく、息苦しいまでに痛々しいのです。「若い音楽家にとって、音楽の喜びや悲しみは、人生だの精神論だのとは何の関係もない。喜びも悲しみも技術だ。(……)その楽器を演奏する人間にしか通じない言葉とテクニックによって学習を繰り返してからでなければ、音楽に到達することはできず、音楽に到達して初めて、音楽家は芸術や精神、さらには人生といった、高次の、そして陳腐な概念に接近していけるのだ」

主人公の「ぼく」にとって、高校の3年間に体験したことは、結果として壮大な悲劇だったかもしれません。でも、彼が感じた喜びも悲しみも苦しみも、すべてがかけがえのないものだったはずです。

そして、この小説が終始、爽やかに感じられるのは、音楽の描写が魅力的だからでしょう。オーケストラ、トリオ、ソロなど、楽譜を追いながら、曲ごとに克明に描かれています。例えば、モーツァルトの『ハフナー』第一楽章を練習する場面です。

「第一ヴァイオリンはコミカルな強弱をつけてレドシラソラシドレドシラソラシドと走り回った。ファゴットはアヒルの赤ちゃんみたいにラソ

ラシドレミレドシラシドレミドとおどけてみせた。ヴィオラはみんなが静かにしている中を得意げに主題を奏で、二人のクラリネットがドーレミファソラシドと音階を吹くと、伊東と沢さんがすぐに続いてラシドレファソラシと応じた」

このような、特別の臨場感をもった音楽シーンは、荘厳なバックグラウンド・ミュージックとなって、この果てしなく切ない青春物語を彩っているのです。



## 『シューマンの指』

音楽大学を舞台にした青春音楽小説といえば、奥泉光さんの『シューマンの指』(講談社文庫)が印象的な作品でした。

シューマンはドイツロマン派の巨匠の一人で、作曲家として数々の名曲を残しています。また、音楽評論家として、ショパン、ブラームス、メンデルスゾーンなどを世に紹介しました。

でも、若いときに指を痛めてピアニストになることを断念しました。また、晩年、精神のバランスを欠いていたようです。こういう影の部分については、あまり知られていません。そして、同じ年生まれであるショパンの圧倒的な人気の前には、かなり影が薄いようです。

ところが、そういうシューマンの



▲ 本学入間キャンパス

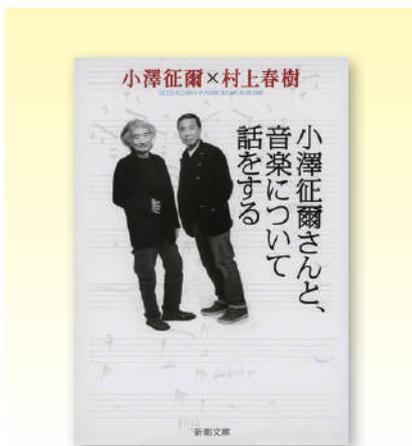
光と影に奥泉さんは着目したのです。そして、『シューマンの指』が生まれました。

この物語は、ミステリーです。指を切断されたはずの天才ピアニストの演奏を見たという奇怪な報告から始まります。

シューマンに取り憑かれた少年たち。彼らの若さゆえの感情過多な振る舞いが、濃密に描かれていきます。読んでいると、彼らが罹っている熱病がうつったかのような気分になります。

そのうえ、少年たち、とりわけ天才美少年ピアニストが熱く語るシューマン論にしても、真剣さが伝わってくるだけに、説得力があります。例えば、こんな言葉です。

「シューマンがピアノを弾く。そのとき、シューマンは実際に出ている音だけじゃなくて、もっとたくさんの音を聴いて演奏している。極端にいうと、宇宙全体の音を聴いて演奏している。だから、シューマンは指が駄目になったとき、そんなに悲しまなかった。だって、ピアノを弾く弾かないに関係なく、音楽はそこにあるんだからね」



## 『小澤征爾さんと、音楽について話をする』

クラシックが苦手なぼくなので、

音楽本の読書量はかなり貧弱です。そういうぼくでも、小澤征爾さんと村上春樹さんの対話本『小澤征爾さんと、音楽について話をする』（新潮文庫）は熱中して読みました。

ここに登場するふたりは、かたや「世界のオザワ」。それに対するのは、その小澤征爾が、「正気の範囲をはるかに超えている」音楽好きだと認められた村上春樹。

このふたりが、いきなりベートーヴェンのピアノ協奏曲第三番の演奏を聞き比べるところから、この対話を始めます。ふたりは自分たちの関心のままに話し続けます。

その内容は、なまじのクラシックファンでも、なかなか歯が立たない代物だろうと推察されます。ましてや、ぼくのようなクラシック苦手人間にとっては、読んでいてちんぷんかんぷんなことも多いのです。

それでも、「天才」と呼ぶしかないふたりの快適な言葉のラリーを読んでいると、音楽、文学などの域を超えた、普遍的な哲学が語られているようにも感じられるのでした。

そして、この本を読んでいくと、こんな会話にも出会います。

「（レコードをかける。）

小澤 このおにぎり食べていいかな。  
村上 どうぞどうぞ。お茶も入れましょう。

（お茶を入れる。）

その場にはいないぼくたちも、お茶をふるまわれたような気分です。

「小澤 マーラーを演奏したオーケストラとしては、僕らはわりに最初の方だったです。（果物を食べる）うん、これおいしいね。マンゴ？」

村上 パパイヤです」

このように、ものを食べるシーンが出てくるのは、小澤さんが定期的になんか栄養と水分を補給する必要があるからです。小澤さんは食道癌の手術をし、その後、いくつか



▲ 本学入間キャンパス

の補助的手術とともに、ジムに通ってリハビリに励む日々を送っていました。

この対話が、その時期におこなわれたことが、こういうちょっとした言葉の端々から感じられます。そして、それとともに、この本をまとめている村上さんが、心底この対話を楽しんでいることも伝わってくるのでした。

こうして、わからないこともありながら、楽しく対話を読んでいくと、小澤さんの音楽に対する考え方が伝わってきます。

例えば、どのようにしてそれぞれの曲を自分のものにするのかについて、彼はこう語っています。

「僕はね、音楽を勉強するときには、楽譜に相当深く集中します。（……）じっと楽譜を見ているとね、音楽が自然にすっと身体に入ってきます」

また、オーケストラをどのように仕込み、まとめあげていくのかについては、こう語っています。

「練習のときにオーケストラを仕込むための棒の振り方というのがある。これがいちばん大事なのです。（……）」

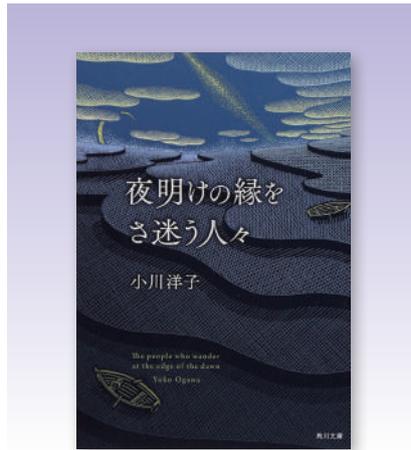
そういうところはね、僕の場合、最初からまったくぶれがないんです」

その他、カラヤンとバーンスタインというふたりの巨匠の秘話や、小澤さんがミラノで見舞われた激しいブーイングのことなどが楽しく語られています。

そして、小澤さんの率直な言葉に反応して、村上さんも自分が創作に臨むときの気持ちをストレートに表白しています。

「いちばん何が大きかっていうと、リズムですね。(……) 前に前に読み手を送っていく内圧的な躍動感というか(……) 音楽と同じです。耳が良くないとこれできないんです」

そして、あまたの輝かしい成功を収めながら、なお先を見すえ、進もうとしている小澤さんの姿には深い感銘を覚えました。



## 『涙売り』

最後に究極の音楽小説とでも呼ぶべく、たくさんの作品を紹介します。それは、小川洋子さんの『涙売り』です。

この作品は、短編集『夜明けの縁をさ迷う人々』(角川文庫)の1編です。この短編集には、女曲芸師と野球少年、エレベーターに住み続ける男など、奇妙な味の短編小説9編が収録さ

れています。

『涙売り』は、自分の涙であらゆる楽器を美しく奏でさせることができる女が、その涙を売って暮らしていく話です。

彼女は、ある時、口笛、耳笛、尻ドラム、髪琴、関節カステネットという、自らの体だけで音楽を奏でる楽団と出会います。そして、関節カステネットを演奏している男に恋してしまいます。

さらに、涙の中でも、肉体そのものを源泉とする「痛み」の涙を楽器は喜ぶことを彼女は知りました。そこで、「最上級の痛みの涙を流すため、私はどんな犠牲でも払う決心をしました」。そして……。

芸術にしても、愛情にしても、純粹に追究していくと、どういふところまで行ってしまうのでしょうか。

それにしても、なんと残酷で、なんと美しいラストシーンでしょう。ぼくは、呆然としてしまいました。

## 音楽の万華鏡 33

### 記念年の作曲家 フローベルガー

今から400年前の1616年、鍵盤音楽の歴史に大きな足跡を残した音楽家が誕生した。ヨハン・ヤーコブ・フローベルガー(1616-1667)である。シュトゥットガルトの音楽一家に生まれて、父や兄から音楽の手ほどきを受けた彼は、同地の宮廷の華やかな音楽生活の中で育つ。その後1634年頃にはウィーンへ向かい、宮廷楽団に加わった。当時の神聖ローマ帝国皇帝フェルディナンド3世(1608-1657)は、自ら音楽をたしなみ、音楽家のパトロンとして知られていたのである。やがてフローベルガーは、当時の鍵盤楽器における大家、ローマのフレスコバルディ(1583-1643)のもとへの留学を願い、ようやく1637年末から1640年まで晩年の巨匠に師事することができた。1641年からはウィーン宮廷オルガニストを務め、1649年には皇帝に自筆の鍵盤曲

集を贈っている。1650年からはヨーロッパ各地へ演奏旅行を行い、フランスでは高い評価を得て、シャンポニエールやルイ・クープラン等の多くの傑出したフランスの音楽家と知り合う。1653年にはウィーン宮廷に復職し、1656年に皇帝にもう1冊の自筆の鍵盤曲集を献上するが、フェルディナンド3世は翌年逝去した。

フローベルガーは師から学んだイタリアの様式、各地を旅行して身に付けたフランスやドイツの鍵盤楽器の伝統を融合して独特の語法を生み出した。彼の鍵盤音楽の中心を占めているのは30曲に及ぶ組曲であり、ここにはその最も優れた手法が見られる。さらに、描写的な標題を持つ作品の作曲家としてのフローベルガーの名声は、すでに18世紀に確立されていた。ここで取り上げる〈フェルディナンド4世陛下の死を悼むラメント〉は、組曲第12番の第1曲アルマンドにあ



ORIGINALHANDSCHRIFT FROBERGER\* IN DER K.K. HOFBIBLIOTHEK.  
(Folio 33, n. 1. Originalhandschrift FROBERGER 9)

る。フェルディナンド3世が後継者に指名していた長男の4世は、1654年に20歳の若さで早逝した。主君の胸中を察したフローベルガーによるこの曲では、曲尾の八長調の上行音階は、天国が放つ光の中、3人の知天使が待つ光輝雲の中に吸い込まれて行き、死者が天国へ迎え入れられたことを添えられたペン画と共に暗示している。

寺本まり子(本学音楽学教授)

# チェコの音楽に魅せられて

後藤博亮

(ヴァイオリン／チェコ国立ヤナーチェク音楽芸術アカデミー博士課程在籍、  
2016年春よりチェコ国立ブルノ・フィルハーモニー管弦楽団入団)

少年の心の琴線に触れたチェコの音楽。憧れ続けてきた国に行き、音楽を学びたい—そんな長年の夢を実現させた後藤博亮さん。言葉の壁を乗り越えてチェコ国立ヤナーチェク音楽アカデミーに進学し、現在は博士課程に在籍しつつ、現地の管弦楽団のヴァイオリニストとしても活動して

います。そして、本号の締切間際に飛び込んできたのが、昨年暮れに受けた入団試験に合格し、今春からチェコを代表する名門オーケストラのチェコ国立ブルノ・フィルハーモニー管弦楽団に第一ヴァイオリンとして入団するという嬉しいニュース。後藤さんの今後の活躍がますます期待されます。



後藤博亮 *Hiroaki Goto*

広島県出身。2011年武蔵野音楽大学を卒業後、プラハ芸術アカデミーを経て、'13年チェコ国立ヤナーチェク音楽芸術アカデミー修士課程に入学。'15年同アカデミーを修了。'14年、'15年にブルノで行われたソロリサイタルでは満席にするなど好評を博す。'15年スロヴァキアのクレムニツァにて行われたフェスティバルでは、L.スワロフスキー指揮の下、バッハの二つのヴァイオリンのための協奏曲の第1ソロヴァイオリンを務めた。これまでにヴァイオリンを加藤節子、中畝みのり、矢嶋佳子、G.フェイギン、P.フーラ、P.ミハリツァ、F.ノボトニーの各氏に、室内楽をZ.ティバイ、G.フェイギン、I.ガヤン、P.ミハリツァ、B.ウィリー、I.ポスピーハルの各氏に師事。現在、ボフスラフ・マルティヌー・フィルハーモニー管弦楽団 ヴァイオリニスト(チェコ・ズリーン)、及びチェコ国立ヤナーチェク音楽芸術アカデミー博士課程に在籍。2016年春よりチェコ国立ブルノ・フィルハーモニー管弦楽団入団。チェコ在住。



CZECH REPUBLIC



▲ チェコ国立ヤナーチェク音楽芸術アカデミー

学認定試験に合格し、チェコ国立ヤナーチェク音楽アカデミーの大学院に進学することができました。

武蔵野音楽大学在学中は、同級生と自由にカルテットなどを組み、発表の機会もたくさんありました。チェコでも積極的に室内楽を組んで、共に勉強することによって仲間ができ、すぐに大学にも馴染むことができました。チェコ語での音楽美学や芸術哲学、楽器学などの授業は大変でしたが、そこで得た知識やインスピレーションは、深く心に刻まれました。

## 脱力のメソッド

ヤナーチェク音楽アカデミーでの

## チェコ語との格闘

14歳の時にチェコの弦楽合奏の演奏会を聴き、「彼らはなんて楽に、自由に音楽をしているのだろう？こんな素敵な世界があったのか」と、その時からチェコという国に憧れ、いつかチェコで音楽を勉強したい！という夢を持ち続けていました。その10年後、24歳になった年に留学を決意。最初はネイティブのチェコ語の速さに全くついていけず、かなりのショックを受けました。それから半年、チェコ語の先生の家に住み込み、毎日6時間ほど必死で勉強した結果、大学入試を受けられるレベルの語



▲ 学友との共演



▲ 弦楽器コレペティートル、ヴラディミール・ホリー氏との共演



▲ 卒業リサイタルのコンセプトに沿ったチラシ

ヴァイオリンの教授は、H. シェリングの高弟で、チェコ国内のほとんどのコンクールの審査員と呼ばれている方です。先生は私の演奏を聴くなり、こうおっしゃいました。「君は演奏を通してやりたい事、伝えたい事がたくさんあるのに、そのやり方がわからないんだね。その方法を教えよう」と。そして課題として出されたのは、中学、高校生の時に取り組んでいたエチュードの抜粋でした。それを、先生の“脱力のメソッド”で勉強し直しました。毎回のレッスンで音がどんどん変わっていき、半年後には魔法のように音楽のことがわかるようになってきました。

アカデミーでは、仕上がった曲は一流のコレペティートルの教授にレッスンを受けることができ、毎週行われる弦楽器セミナーなどの機会を通じて、大学のホールですぐに弾かせてもらえます。コレペティートル

の教授は、“単なる学生の伴奏”という雰囲気ではなく、“音楽家同士”という対等な立場に立って音楽を作り上げてくださいます。卒業リサイタルでは、有難いことですが、友情出演として2人の素晴らしいコレペティートルに、B. マルティヌーのソナタ第3番とベートーヴェンの協奏曲を伴奏していただきました。このリサイタルは、試験という意味合いも含まれていましたが、思い切って自主企画風にして、自分のアイデンティティである“禅寺の息子”というものをふんだんに取り入れた『座禅と瞑想と音楽』のコンセプトのもと、それぞれの曲を演奏。J.S. バッハの協奏曲では、同級生による弦楽合奏団が結成され、協演してもらいました。

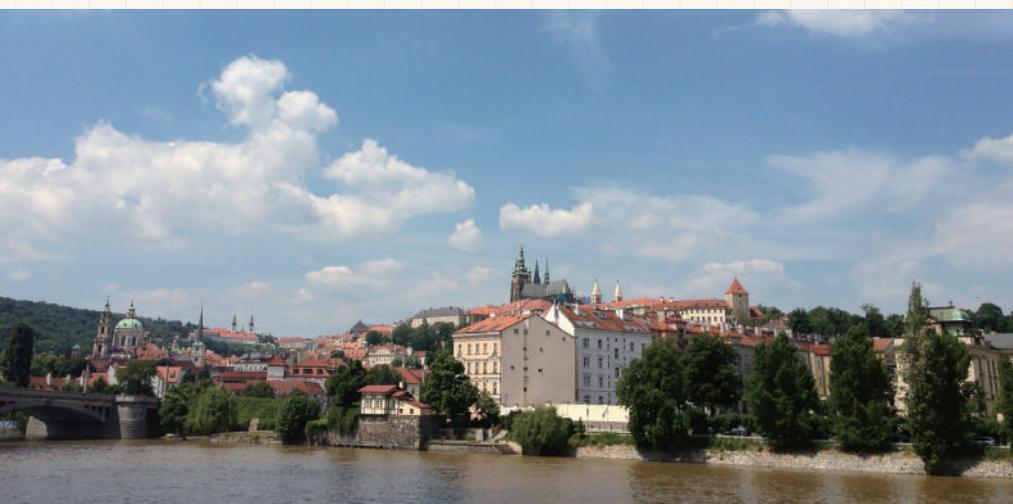
終演後、ベルリンフィルで弾いている同級生が顔を真っ赤にしてやってきて、こう言ってくれました。「Hiro! 凄い! 今の君なら、どこでもやって

いけるよ!」。国立劇場のコンサートマスターやソリストの友人たちも、「おめでとう! こんな演奏会聴いたことがない、感動したよ」と声を掛けてくれ、本当に温かい気持ちになりました。

## チェコ音楽のさらなる研鑽

大学院在学中、同級生から「私の住んでいる街のオーケストラのオーディションを受けてみない? 今年で70年の歴史があり、ホールも新しく出来たばかりで若者が多いから、君ならすぐ馴染めるのでは?」と誘われ、挑戦してみることにしました。オーディションではスメタナやドヴォルジャーク、ヤナーチェクのオーケストラスタディを多く弾きました。チェコ音楽は、とにかくアーティキュレーションにおける指示が細かいのが特徴で、審査では細部に至るまでニュアンスを出すことが求められます。結果は合格でした。初めてのオーディションで結果が出たことに自分でもびっくりしましたが、楽譜に書いてあることを素直に表現した成果だと思いました。

また、卒業が近づくにつれ、コレペティートルの教授とチェコ音楽やスロヴァキアの音楽のレパートリーについて、より深く研究していきたいという気持ちが強くなり、博士課程の試験を視野に入れて活動するようになりました。入試では、チェコ



▲ プラハの美しい街並み

全土の国立音大の教授がズラリと並び、とても緊張しましたが、チェコ音楽のレパートリーに対する演奏解釈や表現方法、またチェコおよび日本で、チェコの作曲家のプログラムをアクティブに取り入れてコンサートを行っていること等が認められ、その結果昨秋から大学に残って、チェコ・スロヴァキア音楽について、じっくり時間をかけて研究をしていけることになりました。



▲ 後藤さんが現在所属するボフスラフ・マルティヌー・フィルハーモニー管弦楽団 (3列目右端が後藤さん)

## “遠くの音”を聴く

オケの仕事が始まってからの生活ですが、毎週月曜日から水曜日の午前中にリハーサルをし、午後は大学に行ってレパートリー研究をしたり図書館に行って勉強したりしています。毎週木曜日に定期演奏会があり、一流のソリスト、指揮者が白熱した演奏をしています。それを、毎回肌で感じられるのが大きな魅力です。土日や夏季休暇、年末には演奏旅行があり、チェコ国内はもちろん、ウィーン、ドイツ、イタリアなどの各都市を訪れて演奏します。

演奏会場は様々で、大ホールで弾く時であれば宮殿の舞踏会ホールや教会で弾く時もあります。意外だったのは、団員は“近くにある音”より“遠くの音”を、より多く聴いているということです。練習しているときも、天井の高い場所で倍音を聴いている

わけですから、日々の練習の中での音の出し方も、日本とは違ってきます。

江古田新キャンパスプロジェクトのために、福井直昭副学長先生主導のもと、大林組のみなさんがチェコにホールの視察に来られた際にも、そんな話をしました。ヨーロッパには、どちらかというと天井が高いサロン風ホールが多く、よく響きますし、何よりも観客との身近さがあります。江古田新キャンパスに新設されるホールも、どんなホールになるのか今からとても楽しみにしています。

## 武蔵野の 建学の精神・3P主義

オーケストラの中での弾き方とソロや室内楽の弾き方は全く違うので、両立が大変ですが、私自身はどちらも必要なスキルだと思っています。オーディションやリサイタルでは、ソリストティックに自分自身の良さを全部出して弾けて初めて“個”の輝きを認めてもらえますし、オケの中では、どちらかという周囲の人と共

に弾く“和”の精神を尊ぶことで、周りあっての自分を感じることができ、調和を生むことができます。

また、生活面で痛感しているのは、武蔵野の3P主義である礼儀、清潔、時間厳守の大切さです。こうした生活の基本がきちんと身につけていけば、世界中どこにいても、スムーズな人間関係が築けるはずですよ。これは「必ずやらなければいけない」というわけではないのですが、自然な礼儀は“善く”人を繋げてくれ、清潔にしていれば、無用なトラブルにも巻き込まれにくく、時間厳守は、自分と周りの人の時間を最大限有効に使うことができていると思っています。目標をしっかり定めて一生懸命やっていると、いつの間にか周りにはかけがえない友達や仲間が出来て、土壇場で助けてくれる存在となってくれます。留学してまだ3年ですが、大きな幸せを与えてくれるのは、いつも音楽を通して出逢い、繋がっている周りの人たちでした。

最後にこの場をお借りして、敬愛する故・池田温名誉教授が、よく私に言うてくださっていた言葉を、そのまま学生の皆さんにお伝えさせていただきます。「休んでもいいし、時には逃げたっていい。でもね、止めちゃだめだよ。人の歩みってというのは、そういうことだよ」



▲ 同級生のコンサートに友情出演

## いよいよ始まった新築工事

前号でお伝えしたように、平成27年4月から始まった江古田旧校舎解体工事は順調に進み、実に半世紀以上ものあいだ多くの学生達が学んだ旧校舎は、9月初旬にベトーヴェンホール棟を残して全て解体されました。今号からは新キャンパスプロジェクト新築工事の進捗状況を皆様にお伝えしていきます。

## 周辺にも配慮しながら 慎重に基礎を構築

新築工事はブラームスホール棟とモーツァルトホール棟（オーケストラ、ウィンドアンサンブル、コーラス用の3つのリハーサルホール、新モーツァルトホールを含む）をまとめた北側のエリアと、キャンパスのコアとなるサンクンガーデンを中心とした教室、図書館、博物館、レッスン室等を配置した南側エリアに大別して行われていきます。これはホール棟エリアとサンクンガーデンを中心とした各棟のエリアでは、地下に構築する基礎の深さや建物を支持する方法が異なるためです。

敷地内に残した桜の木や周辺地域の木々が色付く中、平成27年10月中旬より、ホール棟の工区では建物の基礎となる耐圧盤という部分の鉄筋工事、コンクリート工事が進み、1階の床までのコンクリートを打設していきました。特にブラームスホールの床は、コンクリートで

ひな壇状を形成し、各客席の下には空調の吹き出し口を設ける構造を予定しているため、とても神経を使い時間をかけて施工されました。現在は平成28年の2月から始まる予定の地上の鉄骨工事に向けた準備に入っています。



▲ ブラームスホール棟1階床（一部ひな壇）躯体工事状況（平成27年11月25日）

一方、地下に楽器博物館やキャンパスレストラン等が入るサンクンガーデンを中心としたエリアは、地下深く7mほど掘り下げていきます。安全に地下作業をするため、また近隣、周辺道路に迷惑を掛けないよう配慮し、建物外周には地盤が崩れないように山留め壁を配置しました。そして平成27年12月7日には、起工式（7月21日）の際に氷川神社からお預かりした鎮物（しずめもの）をサンクンガーデンの中心に埋め、学園・工事関係者一同でこれからの安全作業を祈願しました。その後12月末迄に教室、レッスン室を配置する部分の基礎躯体工事を構築しました。

工事とは別に10月には、学園関係者、設計者によって建物の外装サンプルなどの選定作業に入りました。学園と株式会社大林組とはこれまで200回に迫る各種会議を重ねていますが、現在はこのように内外装の物決めという重要なステップに入っています。



▲ 現場全景・ブラームスホール棟地下躯体工事時（平成27年10月23日）



▲ 東棟地下階（打楽器室部分）配筋開始状況（平成27年11月24日）



▲ 北側工区タワークレーン組立状況（平成27年12月3日）



▲ 鎮物式（平成27年12月7日）

# 。仮囲いはアート of 趣。

## 芸術の街を演出する『仮囲いグラフィック』

工事現場の周囲を工事期間中に囲う「仮囲い」は、ややもするとその景観に無機質なイメージを与えがちです。そこで平成27年11月末、新キャンパス建設中の工事現場の仮囲いに、新キャンパスの各種パース(完成予想図)や



学園の新エンブレム(下段参照)などによってデザインされたシートが貼付されました。南東角に位置する幅約20メートルのものをはじめと

し、南面から東面にかけての全長170メートル間に広がるいくつかのグラフィックは、地元の方々や大学付近を訪れる多くの人々の足を止める興味深いものとなっており、生まれ変わる武蔵野の未来を地域にアピールしながら芸術の街に新しい景観を作り出しています。本学園は「地域の皆様と共生しながら工事を進めていく」ことを重視していますが、竣工までの間、工事現場を彩るアートとして現場と地域の皆様とのコミュニケーション向上に寄与していくことでしょう。



## 学園の公式エンブレム決定！

本学園が、これまで使用してきた校章に加えて公式ロゴマークを制定したことは、デザイナーの松浦巖氏のインタビューを含め本誌 Vol.114 で詳しくお伝えしました。ロゴマークは、「MUSASHINO ACADEMIA MUSICAE」の頭文字MAM3文字の組み合わせにより建学の精神「和」をシンボリックに形にしており、学生同士、学生と教員、大学と社会の「融合」「ハーモニー」を活性させることが期待されています。なお本ロゴマークは、平成27年7月31日付けで特許庁による商標登録証が交付され、商標登録されました(登録第5782201号)。

さらにこのたび学園の公式エンブレムが、平成27年10月の理事会・評

議員会で決定いたしました。武蔵野ブランドを表す3つの要素であるロゴ(シンボルマーク)、校名、創立年を組み合わせて、ロゴマークと同じく松浦巖氏によってデザインされました。

ロゴマークならびにエンブレムは、日本で最初に音楽大学として認可された武蔵野音楽大学がこれまで築いてきた「伝統」と、江古田新キャンパスプロジェクトを中核としてさらなる飛躍を目指す「未来」の、2つを表すマークとして機能することをクリエイティブコンセプトにしています。今後は幼稚園の制服、パンフレットや広告、ウェブサイトなどの対外的なコミュニケーションを図る媒体に活用していきます。





## 管弦楽団合唱団演奏会・ウィンドアンサンブル演奏会

昨年10月末から12月にかけて、武蔵野音楽大学の後期演奏会が、学内外で順次開催されました。

まず、10月31日、2年生を中心とした管弦楽団（指揮：北原幸男教授、ヴァイオリン独奏：大久保良明 修士課程ヴィルトゥオーソコース1年）が入間キャンパス バッハザールで行われた入間市中央公民館主催の「市民コンサート」に出演し、モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第3番、ドヴォルジャーク：交響曲第8番などを演奏。続く11月14日には、同じく2年生で構成されたシンフォニックウィンドオーケストラ（指揮：前田 淳准教授）がバッハザールで演奏会を開催し、スパーク：ドラゴンの年や川辺 真（本学教授）：序曲「希望岬にて」など吹奏楽の名曲を、フレッシュなサウンドで



演奏し好評を博しました。

12月に入り、本学管弦楽団合唱団演奏会（指揮：飯守泰次郎氏、合唱指揮：栗山文昭教授）が、バッハザール（1日）**①**、東京芸術劇場 コンサートホール（2日／表紙写真）で2回にわたり行われました。モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジークに続き、オルフ：世俗の賛歌《カルミナ・ブラーナ》では、ソリストに、ソプラノ 砂川涼子、テノール 小笠原一規（1日）・曾我雄一（2日）、バリトン 谷 友博（以上本学教員、卒業生）を迎え、附属音楽教室の児童合唱も加わった大合唱と大編成のオーケストラが、緩急のあるドラマティックな楽曲を熱演し、その圧倒的な迫力で聴衆を魅了しました。

14日には、ウィンドアンサンブルが東京芸術劇場 コンサートホールで演奏会（指揮：リチャード・K. ハンセン 客員教授）を行いました**②**。ハワード：グランド・キャニオン・ファンファーレ、ネルソン：サバナ川の休日、パーシケッティ：吹奏楽のための詩篇、エレビー：パリのスケッチ、樽屋雅徳：トビアスの家を去る大天使ラファエル、バーンスタイン：《オン・ザ・タウン》より〈タイムズ・スクエア〉、ボザ：森にて（ホルン独奏：丸山 勉准教授）などの目新しいプログラムを次々に演奏。ダイナミックで温か味のあるサウンドに会場から大きな拍手が送られ、今年の演奏会シリーズを無事締めくくりました。



## 秋を華やかに彩ったコンサート

木々の葉が黄金色に染まった昨秋、恒例の武蔵野のコンサートシリーズが行われました。

まずは、本学室内合唱団演奏会が9月30日、練馬文化センター大ホールにて開催されました**①**。栗山文昭本学教授、片山みゆき講師の指揮で、グレゴリオ聖歌、ビクトリア、モーツァルトのミサなどの古典から三善晃、

武満徹の現代曲まで、幅広い時代の作品に加え、NHK 合唱コンクールの課題曲などを交えた多彩なプログラムが歌われ、清朗な歌声と研ぎ澄まされたハーモニーに、多くの聴衆が酔いしれました。

11月20日には、客員教授に在任中のイリヤ・イーティン氏によるピアノリサイタルが、バッハザールにて



開催されました**②**。イーティン教授は、ロベール・カサドシュ国際ピアノコンクール、リーズ国際ピアノコン



ラベスク」と「前奏曲集第1巻」、休憩後にベートーヴェン「アンダンテ・ファヴォリ」とブラームス「ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ」と、フランスとドイツの対照的なピアノの名品を演奏。精緻で深い音楽性と完璧なテクニックに、聴衆から熱い拍手喝采を浴びました。

また、9月22日に第19回を迎えた

「武蔵野音楽大学附属高等学校 在校生と新卒業生によるコンサート」が、王子ホールで、さらに11月19日には「ニュー・ストリーム・コンサート27 ～ヴィルトゥオーソ学科演奏会～」が、トッパンホールにて開催されました。これまでの学修の成果を存分に発揮して若さ溢れる演奏を披露し、春秋に富む学生・生徒たちへ会場から温かい拍手が送られました。

❖ ❖ ❖ ニュー・ストリーム・コンサート27 ～ヴィルトゥオーソ学科演奏会～ ❖ ❖ ❖

平成27年11月19日 トッパンホール



馬場翔太郎(ピアノ)



佐藤祐実(フルート)



野川かおる(ピアノ)



平山 慧(クラリネット)



綾目奈緒子(オーボエ)



犬飼まお(ピアノ)

アークヒルズ音楽週間 2015 に本学ビッグバンド(特別編成) 出演 !!

音楽をもっと自由に身近に感じられる地域密着のイベントとして、今回で5回目を数える「アークヒルズ音楽週間2015」(主催：森ビル/サントリホール)が、昨秋10月、六本木アークヒルズで8日間にわたり開催され、武蔵野音楽大学も参加しました。

このフェスティバルのために特別に編成されたジャズオーケストラ「Ciao!!」が、10月9日18:00～、19:15～の2ステージ、アーク・カヤン広場で演奏しました。在学生・

卒業生を交え総勢50名が「Take the A Train」「Moonlight Serenade」「Cruisin' for a Bluesin'」などジャズの名ナンバーを披露し、2ステージとも会場は満員となり大盛況でした。アンコールでは、出演者全員で演奏し、若さはじける熱演に会場は大いに盛り上がり、拍手喝采をいただきました。



拍手喝采をいただきました。

## 入間キャンパスで開催！ ミューズフェスティバル

平成27年度“ミューズフェスティバル”が、去る10月22日から25日にかけて、秋の装いを見せ始めた自然豊かな入間キャンパスにおいて開催され、武蔵野の新たな時代を目ざして「創 year! (そいやッ!)」をテーマに、大学全学年が集いました。現在進行中の「江古田新キャンパスプロジェクト」に伴う特別な移行期間の中で、学生たちはさまざまな努力と工夫を重ねて、企画・運営に取り組みました。

フェスティバルの中心は、学生たちが日頃の研鑽の成果を発表する演奏会。多彩な形態のアンサンブルが、バッハザールをはじめ特設ステ

ジで次々と繰り広げられました。加えて、本学管弦楽団、コンサートバンド（吹奏楽）、フルートオーケストラの特別演奏会も開催され、来訪者は音楽に溢れた贅沢な時間を楽しみました。

その他、学年の枠を超えたクラブ活動、楽器会、県人会の各団体が、それぞれに趣向を凝らしたアイデアで、研究発表、展示、模擬店を随所で展開、フェスティバルに彩りを添えました。

また、同じキャンパスに学ぶ、幼稚園、音楽教室、附属高等学校も参加しました。幼稚園では、『ゆめをあつめて』をテーマに、子どもたちの個性豊かな作品を展示。附属高等学校では、



1年生はクラスの催し物、2・3年生は専攻別による学年アンサンブルの演奏発表、そして、年間を通じて活動してきた音楽鑑賞・美術・華道・ダンスの展示や発表も行われ、学園が一体となって作り上げたフェスティバルは、連日賑わいをみせ成功裡に終了しました。



## 栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

（順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの）

- 平成27年度 兵庫県文化賞受賞 金 昌国（本学特任教授）
- 第84回 日本音楽コンクール トランペット部門 第1位入賞、岩谷賞（聴衆賞）、E・ナカミチ賞受賞 守岡未央（平成23年大学卒トランペット専攻）
- 公益財団法人 日本演奏連盟 助成金 増山美知子奨励ニューアーティストシリーズに選出され、ソロリサイタルを行う 丸山葉子（平成18年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程修了）
- 第7回 東京国際声楽コンクール 大学生部門 第3位入賞（1位なし） 奥秋大樹（大学4年次在学声楽専攻）
- 第16回 ANP ル・ブリアン フランス音楽コンクール 銀賞受賞（1位なしの2位） 宇高陽子（平成17年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程修了 本別科修了）
- 第20回 JILA 音楽コンクール マリンバ部門 第3位入賞（1位なし） 加賀谷巧（平成26年大学卒マリンバ専攻 本大学院修士課程1年次在学）
- 第26回 彩の国・埼玉ピアノコンクール F部門 銅賞受賞 平林咲子（大学1年次在学ピアノ専攻）
- 第9回 横浜国際音楽コンクール サクソフォン部門 高校の部 第1位入賞 金澤ニコラス（本高校3年次在学サクソフォン専攻）

※上記の他多数。大学ウェブサイトをご覧ください。

## 武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、江古田新キャンパス建設基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。 学校法人 武蔵野音楽学園

※ご芳名（五十音順）は、平成27年8月1日から11月15日までにご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何とぞご了承ください。

※本学学園ウェブサイトからも、ご寄附いただけるようになりました。クレジットカード決済により簡単にお手続きができます。是非ご利用ください。

**【同窓生】** 伊藤菊子様 上田一江様 大澤玲子様 小黒智子様 笠井キミ子様 川谷登喜子様 久慈信子様 白石敬子様 関 絵里奈様 関 多美江様 高橋利子様 田代珠子様 永田伸子様 船橋信子様 松浦靖子様 藪内和子様 山戸麻衣子様 善積千砂子様

**【在学生・同ご父母】** 伊東立雄様 井上加代様 高橋耐二様 高橋弘子様 滝沢進様 三浦周様

**【役員・教職員・一般・他】** 北原幸男様 古池好様 小酒理恵子様 柴 香苗様 清水直美様 関根弘美様 富樫英夫様 中田淳子様 中谷智美様 二瓶武廣様 林 孝治様 福井直昭様 前原信子様 三村隆文様 深山尚久様 守信信郎様  
(他に匿名を希望される方13名)

### 平成28年度 学生・生徒募集のお知らせ(入学試験日程)

#### 武蔵野音楽大学大学院音楽研究科(博士後期課程)

大学院博士 後期課程入試	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
音楽学・音楽教育	平成28年2月1日(月)消印 ～12日(金)消印	郵送のみ	平成28年 2月23日(火)・24日(水)
器楽・声楽・作曲	平成28年2月1日(月)消印 ～12日(金)消印	郵送のみ	平成28年 3月8日(火)～10日(木)

#### 武蔵野音楽大学(音楽学部)

	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
1年次 一般入試 A日程	平成28年1月15日(金)消印 ～30日(土)消印	平成28年 1月29日(金)・30日(土)	平成28年 2月18日(火)～22日(土)
1年次 一般入試 B日程	平成28年2月23日(火)消印 ～3月2日(水)必着	平成28年3月3日(木)	平成28年 3月5日(土)～7日(月)
1年次 一般入試 C日程	平成28年3月7日(月)消印 ～13日(日)必着	平成28年 3月14日(月)	平成28年 3月16日(水)～18日(金)
3年次 編・転入学入試	平成28年1月15日(金)消印 ～22日(金)消印	郵送のみ	平成28年 2月10日(火)～12日(木)

●一般入試A日程およびB・C日程の受験では、国語・外国語(英または独)について、大学入試センター試験を利用できます。

#### 武蔵野音楽大学(別科)

別科入試	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
	平成28年1月21日(日) ～28日(日)消印	郵送のみ	平成28年 2月10日(火)・11日(水)祝

#### 武蔵野音楽大学附属高等学校(音楽科)

附属高等学校 推薦入試	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
	平成28年1月7日(日) ～15日(金)必着	郵送のみ	平成28年 1月22日(金)
附属高等学校 一般入試	平成28年1月23日(土) ～29日(金)消印	郵送のみ	平成28年 2月11日(火)祝

※入学試験の詳細については、各入学試験要項でご確認ください。

**【会場】** 武蔵野音楽大学入間キャンパス

**【要項請求】** 各入学試験要項は、入間キャンパスで取り扱っています。郵送をご希望の方(平成28年度受験対象者)には、無料でお送りします。本大学ウェブサイトの資料請求フォームからご請求ください。

大学ウェブサイト <http://www.musashino-music.ac.jp/>

お電話にてご請求の場合は、氏名、住所、電話番号、および高校、大学1年次、大学3年次、大学院、別科の別をお知らせください。なお、受験講習会受講者には、第1年次入学試験要項を講習会期間中に配付します。

武蔵野音楽大学企画部広報課 TEL.04-2936-9737

**【お問合せ】** 武蔵野音楽大学入学試験事務局 TEL.04-2936-9781

## 音楽教室(江古田・入間・多摩) 生徒募集のお知らせ

### 受験資格(平成28年3月末現在)

プレコース	3歳	
スタンダードコース ソルフェージュコース	初級	4歳～小学校1年生
	中級	小学校2年生～小学校6年生
	上級	中学校1年生～高等学校2年生
受験コース	高校	中学校1・2年生
	大学	高等学校1・2・3年生
エクセレンスコース(江古田音楽教室のみ設置)	5歳～高等学校2年生	

**【前期入室試験】** 平成28年3月6日(日)

各音楽教室 \*エクセレンスコースは江古田音楽教室で行います。

**【願書受付】** 平成28年2月3日(火)～20日(土) ※日曜・祝日を除く

\*入室試験の詳細については、平成28年度生徒募集要項でご確認ください。

\*要項は郵送及び各音楽教室で取り扱っております(要項・送料は無料)。ウェブサイトの資料請求フォームからもご請求いただけます。その他詳細については、下記へお問い合わせください。

■江古田音楽教室 TEL.03-3994-7536 ■入間音楽教室 TEL.04-2932-1111

■多摩音楽教室 TEL.042-389-0711

音楽教室ウェブサイト [http://www.musashino-music.ac.jp/music\\_school/](http://www.musashino-music.ac.jp/music_school/)

### 編集 後記

大学生が本を読まなくなった、と言われるようになったのはいつ頃からでしょうか？電車のなかでも、本を開いている若者は少なく、多くがスマートフォンの画面に見入っています。本は自分の世界を広げてくれる最高のツール。人生を豊かにするだけでなく、読書を通しての感動や刺激は、

音楽をするうえでもきっとプラスになるはず。今回、松田哲夫さんが挙げてくれた音楽にかかわる本をきっかけに、暮らしのなかに読書の時間を少しでも取り入れてはいかがでしょうか。日本屈指の音楽資料を誇る武蔵野の図書館にも、あなたを新しい世界にいざなう本がきっとあるに違いありません(編)。

れいじんのまい  
**伶人舞**

江戸時代初期から中期頃 (推定) 日本

宮廷の音楽として平安時代に隆盛した雅楽は、応仁の乱以降、京都の荒廃とともに多くの楽人たちを失ってすっかり衰退してしまっただ。この危機的状況を救ったのが京都の楽人のほかに天王寺(大阪)や南都(奈良)から楽人を加えて新たに結成した「三方楽所」である。この三方楽所の出現により再び雅楽は復興の兆しをみせる。江戸時代になると、泰平の世と徳川幕府の庇護のおかげで、雅楽は楽人や諸大名が行うほか、地方の藩校などでも教習されて広く一般にも普及した。経済的に豊かな藩主が三方楽人に入門することもあった。このように雅楽は江戸時代に再び盛んになり、平安期に次ぐ第二の隆盛期ともいわれている。

写真の絵巻物は、舞楽曲を舞う伶人の様子が描かれたもので、上・中・下の三巻にわたって全51曲が収められている。三巻を収納する桐箱の蓋上面には、「進上 伶人舞 三巻 尾張中納言」という墨書があり、尾張中納言に献上された品であることが窺える。製作者に関する手がかりは少ないが、その画風から土佐派の流れをくむ人物の作品で、雅楽が隆盛し始めた江戸時代初期から中期頃に描かれたものではないかと推測



される。

尾張徳川家では、式楽である能楽とならんで雅楽も古くから盛んにおこなわれており、中でも初代藩主義直、2代光友、3代綱誠は音曲に造詣が深かったと伝えられている。特に父家康譲りの学問好きで知られる初代義直は、雅楽への関心も高く、3代将軍家光に楽箏を献上したり、真清田神社の雅楽の再興に尽力した人物でもある。

16代続いた歴代尾張藩主の中で「尾張中納言」と呼ばれた者は半数近くいたが、この絵巻物の献上先として可能性が高いのは、作品の年代などから推測すると2代光友(のちに権大納言)、3代綱誠あたりが有力ではないかと思われる。

(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)

大学機能の一時移転のお知らせ

武蔵野音楽大学は、現在進行中の「武蔵野音楽学園江古田新キャンパスプロジェクト」に伴う新築工事のために、平成29年3月まで大学の機能を入間キャンパスに移転しています。期間中は何かとご迷惑、ご不便をおかけいたしますが、ご理解いただきますようよろしくお願い申し上げます。

❖ 目次 ❖

- 謹んで新年のお慶びを申し上げます ..... ①  
福井直敬
- 本の世界で音楽と戯れる ..... ②  
松田哲夫
- 音楽の万華鏡 ..... ⑤  
記念年の作曲家フローベルガー 寺本まり子
- 卒業生の留学ライフ ..... ⑥  
チェコの音楽に魅せられて 後藤博亮
- 江古田新キャンパスプロジェクト REPORT ⑦ ..... ⑨  
いよいよ始まった新築工事。仮囲いはアートの趣。
- MUSASHINO NEWS ..... ⑪
- ❖ 管弦楽団合唱団演奏会・ウィンドアンサンブル演奏会
- ❖ 秋を華やかに彩ったコンサート
- ❖ アークヒルズ音楽週間2015に本学ビッグバンド(特別編成)出演!!
- ❖ 入間キャンパスで開催! ミューズフェスティバル
- ❖ 栄冠おめでとう! (コンクール入賞者等)
- ❖ 武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々
- ❖ 平成28年度 学生・生徒募集のお知らせ(入学試験日程)
- ❖ 音楽教室(江古田・入間・多摩) 生徒募集のお知らせ

武蔵野音楽大学大学院  
博士前期課程・博士後期課程  
武蔵野音楽大学  
武蔵野音楽大学別科  
武蔵野音楽大学附属高等学校  
武蔵野音楽大学第一幼稚園  
武蔵野音楽大学第二幼稚園  
武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園  
附属音楽教室 江古田・入間・多摩

❖ 発行 ❖

学校法人 **武蔵野音楽学園**

- 入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728  
TEL.04-2932-2111 (代表)
- 江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1  
TEL.03-3992-1121 (代表)
- バルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1  
TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2016年1月10日発行 通巻第116号